Ⅳ 下呂市立萩原小学校の実践

1　学校の概要

学校の規模

全校児童数524名で，通常学級が16学級，特殊学級２学級（情緒障害学級と知的障害学級），言語障害通級指導教室１教室設置されています（平成16年度）。

地域の特色

校区は南飛騨の山間の南北に長い地域で，スクールバスを利用して通学している子どももいます。自然に恵まれ校区の北から南へ飛騨川が流れ「鮎・アジメの里」とも呼ばれています。地域に暮らす人々の結びつきは強く，保護者もこの学校の出身者であったり，祖父母と同居していたりする家庭も多くみられます。

学校の教育目標

学校の教育目標として，「ともに学びきり拓いていく子」を掲げています。それを受け，学習では研究主題を「仲間とともにひびき合い，楽しく学ぶ国語科の授業－聞き取る力と表現する力を育てながら－」とし，学年に応じ「仲間の話を聞く，仲間に伝わるように話す」力を育てるよう全校で取り組んでいます。特別活動では，学年を縦割りにしたグループを作り「ファミリー活動」と名づけ，年間を通して遊びや・校外活動を行っています。健康指導では，一輪車や竹馬などを利用して，運動的な遊びを通した体力づくりにも力を入れています。

特殊学級について

- **設置状況**　情緒障害学級（あすなろ学級）２名，と知的障害学級（ふたば学級）１名の２学級計３名が在籍しています。市内に養護学校がなく，最も近い飛騨養護学校に通学する場合でも車で１時間近くかかります。就学指導で養護学校をすすめられても，本校の特殊学級に就学する場合もみられます。
- **教育課程の概要**　情緒障害学級では，生活単元学習を週５時間，日常生活の指導を週３時間設定している。音楽，体育等の授業は通常学級と交流しています。知的障害学級では，生活単元学習を週５時間設定しています。音楽，体育等の授業は通常学級と交流しています。

学級経営の基本方針と特徴的な取組

特殊学級の学級目標は，２学級ともに「なかよし　チャレンジ」を掲げており，学習や生活の色々な場面で合い言葉として子どもも教師もたびたび口にしています。仲間と関わり合う活動では「なかよし」，新しいことや少し抵抗のあることをがんばる活動では「チャレンジ」を使っています。また，二つの学級を合わせて愛称として「なかよし学級」と全校児童から呼ばれています。

二つの特殊学級は，それぞれに子どもの実態に合った生活単元学習を設定していますが，季節ごとの集会活動として「新しい友達を迎える会」「１学期のまとめ会」などの活動は合同で行っています。

さらに，年に３回の通常学級との交流行事を行うことがならわしとなっており，それも知的障害学級と情緒障害学級が合同で進めています。１学期は「なかよし七夕」で，１年生と２年生の全学級を順番に招待して七夕集会を行っています。２学期は,「なかよし運動会」で，特殊学級と交流のある通常学級を順番に招待してミニ運動会を行っています。３学期は,「なかよしえんぴつやさん」で,「心とこころ」の鉛筆等の販売を全校児童に呼びかけて，昼休みなどに販売しています。

2　単元「なかよし七夕」をしよう

はじめに

「なかよし七夕」は，長年行っている交流行事です。７月の七夕の時期に，１年生と２年生を学年ごとに招待して「七夕かざりの会」をします。低学年の子どもにはこの行事を通して，特殊学級の仲間に親しさを感じてほしいと願っています。特殊学級の児童は，低学年を招待して一緒に楽しんだり，教えてあげたり見せてあげたりすることを毎年楽しみにしています。さらに，七夕の時期を通して，廊下に「笹竹」を立てて，短冊を用意しておきます。どの学年の子どもも，昼休みなどに願い事を書いて吊すことで，「なかよし七夕」に参加できるようにしています。

（１）単元設定の理由

①低学年との交流行事を行うことの意味

入学したばかりの１年生は，生活科の学習で校内探検をします。特殊学級の教室を見学して，楽しそうな学習道具に目をつけて，休み時間に遊びに来る子どももいます。「この教室は，なんで三人しかおらんの。」「どういう勉強をしとるの。」と疑問をもって質問してくる子どももいます。多くを説明するよりも，特殊学級の子どもと触れ合う活動をすることで，この学級の存在や，一人一人の子どものことを知ってほしいと考えています。さらに，２年生になってもう一度同じ行事があることで，交流することを楽しみに思ってほしいと願っています。

②特殊学級の子どもの願い：私も低学年のお世話をしてあげたい

６年生のＣ児は，通常学級の同級生が，児童会の活動などで下学年の子どもの前に立って指示を出したり，お世話をしたりしていることをうらやましく思っています。「なかよし七夕」は，Ｃ児が願っている低学年の子どものお世話ができる活動がたくさんあります。集会の司会をしたり，ダンスの見本を見せたり，一人一人の手をとって折り紙を教えたりすることができます。

（２）設定単元の特色

「なかよし七夕」では，１年生の３学級を一度に招待して，次に２年生の３学級全体を一度に招待します。そして，この行事の中心的な活動は，特殊学級の子どもが一人一人のコーナーに分かれて七夕飾りを教える場面です。特殊学級の子どもは，自分の担当する飾りのコーナーに来た子どもたちの前で，あらかじめ準備した作り方のポスターを見せながら，折り方の説明をします。そのあと，一緒に飾りを作ります。難しいところは質問されたり，直接手を貸してあげたりしています。

（３）特殊学級の子どもの実態について

３名の子どもは，４，５，６年生各１名と，いずれも「なかよし七夕」の経験が何度かあるので，それぞれに活動を具体的にイメージすることができ，今回の「なかよし七夕」ではこんなことが

したいという願いをもっています。

Ａ児やＢ児は低学年の頃は，七夕飾りの作り方を教えることは難しかったので，折り紙を配る係などを受け持っていました。けれども，学年があがるにつれて，自分も教えてあげたいと願うようになり，昨年はそれぞれ一つずつの七夕飾りを教えるコーナーを受け持ちました。

写真１　あさがおの作り方

Ａ児（４年生男児：教える飾りは折り紙の「アサガオ」）

３年生だった昨年は「ヨット」の折り方を覚えて，大勢の子どもの前で教えてあげたことで自信をもちました。今年は，折り紙の本を見て自分で「アサガオ」を選んで，これを教えてあげたいと願っています。

Ｂ児（５年生：教える飾りは折り紙の「さんかくくさり」）

大勢の仲間が来てにぎやかに活動することは大好きで，交流の行事を楽しみにしています。「七夕かざりの会」の最初に歌を歌い，ダンスをすることも，好きな活動なので楽しみに思っています。細かい作業は難しいのですが，小さな折り紙を三角に折って三つ重ねて貼る「三角くさり」を教師が作って見せると，それを教えてあげることに決めました。

Ｃ児が七夕物語のペープサートで織り姫をやりたいと言っているのを聞いて，自分は相手役のひこ星をやりたいと絵を指して伝えました。

Ｃ児（６年生女児：教える飾りは折り紙の織り姫）

日頃から低学年の子どもと遊ぶことが好きで，低学年の子どもを招待する「なかよし七夕」は楽しみにしている行事です。昨年は，「織り姫」の折り方を教えました。難しい折り紙を教えられたことを得意に思っていて，今年も同じものを教えてあげることを以前から決めていました。

写真を見ながら昨年の活動を思い出すなかで，昨年のように特殊学級の子どもがダンスを見せるのではなく，招待した人と一緒にダンスを踊りたいという提案をしました。

教師が「天の川にかけるはし」という七夕物語の紙芝居を読んだのを聞いて，「このお話で劇をやりたい。」と提案して，自分は織り姫の役をやると決めました。次の時間には，自分で「織り姫，ひこ星，天の神様」のペープサートを一人で作っていました。

（３）単元計画

①ねらい

この単元では，以下のようなねらいをもって取り組みました。

○どんな「なかよし七夕」にしたいかという願いをもち，自分の得意なことを生かして「なかよし七夕」を３人で進めることができる。

○「なかよし七夕」の活動を通して，多くの仲間と交流する。

・低学年の仲間を「七夕かざりの会」に招待して，七夕飾りの作り方を教えてあげながら親しくなる。

・全校の仲間に呼びかけて，願い事の短冊をつけてもらう活動を通して，多くの仲間とふれあう。

・あさがお学級（Ｃ児が進学する中学校の特殊学級）を「七夕かざりの会」のリハーサルに招いてアドバイスを受けるなかで，中学生に対する憧れや身近さを感じる。

②単元の進め方

単元を進める計画について，特殊学級（あすなろ学級とふたば学級）の活動と通常学級の計画を表１に示しました。

表１　単元の進め方

あすなろ・ふたば学級	通常学級との交流
〈６月中〉 １．「なかよし七夕」計画を立てよう 単元マップ（単元の計画書）を作ろう ２．七夕のお話をペープサートにして，練習しよう ３．笹竹と短冊を準備しよう ４．１年生２年生に七夕かざりを教えてあげる準備と練習をしよう ５．「七夕かざりの会」のプログラムを作り会の進行の準備をしよう ６．放送やポスターで「なかよし七夕」の呼びかけをしよう 〈７／２　５時間目〉 あさがお学級の仲間を迎えて「七夕かざりの会」の練習をしよう 〈７／８　５時間目〉 笹竹を燃やして「七夕じまいの会」をしよう	〈７／１～７／７　休み時間〉 全校の児童が短冊に願い事を書いて飾る ・３．４．５年生－あすなろ学級前廊下 ・１．２．６年生－ふたば学級前廊下 〈７／７　１時間目〉 １年生を招いて「七夕かざりの会」 〈７／８　２時間目〉 ２年生を招いて「七夕かざりの会」

（４）活動の実際

①事前の活動のなかで

ア　通常学級の担任に協力してもらうために

このような交流を受け入れる側，通常学級の担任は，どのような思いでこの活動を捉えているのでしょうか。先ず年度当初の職員会の場で，資料に基づいて特殊学級の子どもの様子や年間にどんな交流活動があるかについて知ってもらうようにしました。さらに，交流の単元に入る前の職員会で，この単元のねらいや具体的な進め方を説明しました。今年度に本校に赴任したばかりで不安に思っている学級担任もいるので，集会の準備や運営などはこちらで進めるので，安心して楽しく参加してもらいたいという説明をすることも忘れないようにしています。

イ　中学生にアドバイスをしてもらおう

中学校の特殊学級とは卒業後の進路のことも踏まえ，年間に何度か交流をしています。この単元は，中学校の特殊学級の生徒も自分が小学生の時に毎年体験した行事であるということもあり，リハーサルに来てもらい先輩としてのアドバイスをするといった活動を位置付けました。

６年生のＣ児は「七夕じまいの会」で「今度は中学生になるので，なかよし七夕のアドバイスに来てあげたい」と発言しました。中学生からアドバイスをしてもらったことが印象に残り，自分も中学生になったら，アドバイスをしてあげたいと考えたのでしょう。

②「七夕かざりの会」当日の活動のなかで

当日の活動は,「始めのことば」で開始し，以下のような流れとなりました。

ア　七夕の歌

「七夕」の歌は１年生の音楽の教材になっており，歌詞を書いた摸造紙を用意しておけば，改めて練習をしなくてもその場で歌える歌です。交流の活動では，それまでの学習で経験したことや学習した事柄を生かすことが大切と考えます。

イ　ダンス「友だちできちゃった」

ここでは,「友だちできちゃった」というダンス曲を取り上げました。ごく簡単なダンスなので，１回目は特殊学級の子どもが全員の前で見本を踊って見せ，２回目は全員で踊ることができました。低学年でも一度見たら踊れる程度の簡単な振り付けのダンスを選ぶことで，低学年が事前に練習して準備する必要はありません。ダンスとしては簡単でも「友だちできちゃった」という曲には交流でのねらいである友だちになることの喜びが表されており，この場によくあったダンスであるといえます。

こうした行事で踊ったダンスや歌った歌は，その後もたびたび昼休みなどの自由な時間に誰かがテープをかけ，自然にみんなで踊ったり歌ったりする場面があります。交流行事の楽しい思い出とともに，楽しい音楽が子どもたちの心に残っていて，踊ったり歌ったりすることで何度も楽しむことができます。

ウ　ペープサート「天の川にかかるはし」

台本は教師が作りました。ナレーターになったＡ児は，音読が得意な子どもです。話の流れは，Ａ児の語りで分かるようにしました。ひこ星になったＢ児の発音は不鮮明なのですが，織り姫になったＣ児の台詞と対になるようにしておけば，見ている子どもたちも台詞を推し測って話を理解することができます。例えば，Ｃ児が「ひこ星さん」と言った後で，Ａ児が「織り姫さん」と応える設定にしておけば，発音が不明瞭でも見ている子どもは伝わります。

このように，台本を工夫することによって演じる方も観客も物語を楽むことができます。

写真２　ペープサート「天の川にかけるはし」

エ　七夕飾りを作ろう

最初に特殊学級の子どもが見本を見せながら七夕飾りの作り方を説明します。低学年の子どもは，張り切って作り始めますが，途中まで作るとその先が分からなくなる子どもが多く，そんな場面では特殊学級の子どもが手を貸して折ってあげることができました。作り方を言葉で教えてあげることは難しいことですが，特殊学級の子どもにとっては，何度も作っている飾りなので，手を貸して教えてあげることは抵抗なくできます。何度か教えるうちにC児は，教師がするのを見て，左右対称に作る片側だけを手を貸してあげて，反対側を「やってごらん」と言って低学年の子どもにも折らせるようになりました。

B児の「さんかくくさり」は，小さな折り紙３枚を三角形に折って，糊で貼ってつなぐものでした。細かな説明はできなくても，作り方の例を示せば低学年にも作りやすい飾りでした。説明のなかで「さんかく」とか「３枚」とかB児が動作をつけながら発音できる言葉が入るようにしました。

（５）活動を終えて

交流活動の終わりには，その行事をまとめる活動をするようにしています。参加してくれた学級にお礼の手紙を書いたり，校内放送で短冊に願い事を書いてくれた全校児童にお礼を言ったりします。

まず，それぞれのコーナーに分れて，飾りの作り方を説明する。

参加者も飾りを作る。分からない子には手を貸し教えてあげる。

写真３　七夕飾り作り

行事が成功したことをお祝いする「七夕じまい会」では，交流の写真などを見て振り返ったり，通常学級から届いたお礼の手紙を読んだりして，がんばったことや楽しかったことやめあての反省などを話し合います。親しくなった低学年の子どもの名前をあげる子どもや，「５年生になったら，船の飾りが作りたい。」というような次年度の活動を楽しみにしていることを話す子どももいます。

毎年，子どもの実態は違うので，同じ交流行事を続けることは難しい面もあります。しかし，子どもの実態に合うように工夫しながら，毎年続けることで子どもたちが昨年の活動を振り返って今年の活動に生かしたり，来年度の活動を楽しみにしたりすることができます。通常学級の子どもたちも，毎年続けている交流について心待ちにしている子どもがおり，特殊学級をのぞいて「七夕はいつからやるの」などと尋ねる子どもがいます。

①単元実施で工夫したところ

交流の中心となる活動を「特殊学級の子どもがそれぞれのコーナーに別れて，低学年の子どもに七夕飾りの作り方を教えてあげる活動」にしたことで，個別に触れ合うことができ，低学年の子どもは教えてくれた特殊学級の子どもに対して親しさを感じることができました。また，特殊学級の子どもが活躍できるように，それぞれの子どもが得意な活動を生かしたり，話すことが苦手な子どもであっても相手に伝わるような手だてを工夫したりしました。さらに，低学年の子どもと交流しやすいように，歌やダンス，ペープサートや七夕飾り作りなどは，低学年の子どもでも簡単にできるものや，すでに学習したものを生かすようにしました。

②この単元を実施して

特殊学級の子どもが計画・準備・運営をして，通常学級の子どもを招待しするという交流スタイルのなかで，特殊学級の子どもが，低学年の子どもの前で司会をしたり説明をしたりするなどの活躍をすることができました。また，交流の授業のなかで，低学年の子どもがダンスやペープサートや七夕飾り作りを楽しむことができ，そのなかで自然に特殊学級の子どもと触れあうことができたと考えています。

課題としては，もっと親しく交流するためには，３学級を一度に招待するのでなく，１学級ずつ招待して少人数で交流する方がさらに親しく交流できたのではないかと思われます。その場合，学校の行事予定や交流に使う教室などの都合を調整することが難しいので，今後どのように解決するかが課題です。

3　単元「なかよし運動会」をしよう

はじめに

毎年11月に知的障害学級と情緒障害学級の子どもが運動会を計画して，交流のある通常学級を１クラスずつ招待しています。この単元を通して，特殊学級の子どもが中心になって運動会を企画し運営することで係や役割を楽しむこと，また楽しい活動を共有することで，通常学級の子どもが特殊学級の子どもに親しみを感じることを願いました。運動会当日までに，活動の計画を立てて道具を作り，運動会のポスターを作って招待する学級にお知らせに行きます。

（１）単元設定の理由

①楽しい交流を

特殊学級と通常学級との交流は，特殊学級の子どもも通常学級の子どもも楽しめる活動であることが大切です。チームに分かれて勝ち負けを競うこの活動は，両方の学級の子どもにとって夢中になって楽しめる活動です。参加する通常学級の子どもは，最初は遠慮がちにしている子どももいますが，競技が進んでいくとみんなで大声で声援をおくったり，負けまいとして必死になったりします。交流活動によって，通常学級の子どもに特殊学級の活動をことばで伝えようとするよりも，楽しい活動を共有した身近な仲間として特殊学級の子どもに親しみを感じてほしいと思います。

②運動会を知らない子はいない

交流の題材として，学校生活のなかで繰り返し経験することや，季節の行事としてよく親しんできていることを取り上げると，お互いに自信をもって楽しく参加できます。

運動会は毎年同じ形で行う学校行事です。通常学級の子どもにとっても特殊学級の子どもにとっても馴染みが深い活動です。通常学級の子どもに「一緒に運動会をしよう」と呼びかけたとき，どんな活動をするのかすぐにイメージできます。

ここでは９月の学校行事の運動会のチームで，そのまま「なかよし運動会」を行うことにしました。そうすることで，学校行事の運動会で歌ったそれぞれのチームの応援歌を練習しなくても歌うことができるなど，経験を生かした活動ができます。

③ぼくも集会の進行をしてみたい

Ｂ児は，体育館での児童会集会等に参加して特殊学級の教室に戻ると，集会で見てきたことを再現して集会ごっこを始めます。マイクをもって挨拶したり司会をしたりしています。ステージに上がってお辞儀をする様子などよく見ていて同じようにやっています。Ｂ児はみんなが集まる集会活動に意味を感じて，それを進めていく役を担ってみたいという憧れをもっています。

特殊学級から発信する交流は，特殊学級の子どもが中心になって集会を企画し運営していくことができます。児童会行事や学級活動で司会をし進行の係をする仲間たちを見て，憧れを感じ，同じことをやってみたいと思っていることを実現する場にできます。

（２）集団構成の工夫

この活動では，一回の運動会に一クラスずつ招待しました。学校行事の運動会では，一クラスを赤団，白団，青団の３チームに分けました。この活動でも，そのチームをそのまま利用し，特殊学級の子どもが，がそれぞれのチームの団長になりました。１チームの人数は十数人になり，そのチームの団長となった特殊学級の子どもに対してより身近さを感じることができると考えました。

（３）特殊学級の児童の実態について

学校行事の運動会の練習が始まると，二つの特殊学級の３名の子どもは「なかよし運動会」についてイメージを膨らませていました。昨年のことを思い出して，今年はどんな係をやりたいか，どんなことが楽しみか，度々話題にしていました。

A児（４年生男児・赤団・判定係）

低学年の頃は，運動会は人と体が触れることが多いので，怖がっていました。ところが毎年経験するうちに楽しいダンスを踊ったり，仲間と一緒に種目をやったりすることを楽しめるようになってきました。「なかよし運動会」でも通常学級の子どもたちを招待することを楽しみに思っています。特に自分の交流学級の４年１組の仲間が来て一緒に活動することを楽しみにしています。

B児（５年生男児・青団・放送係）

マイクを持って話すことに強い憧れをもっています。マイクを持つとうれしくてなかなか手放せず，司会ごっこなどをしています。去年の「なかよし運動会」でC児が放送係をしたことをうらやましく思い，今年は放送係をしたいと繰り返し言っていました。大勢の仲間と一緒に活動することが大好きで，集会活動や交流行事を楽しみにしています。

C児（６年生女児・白団・得点係）

学校行事の運動会では応援団の振り付けに興味をもって，白団だけでなく全部の団の応援の振り付けを覚えてしまいました。応援団と同じポンポンを作って，毎日休み時間になると繰り返し応援ごっこをして遊んでいました。「なかよし運動会」の応援団をやるのをとても楽しみにしています。なかよし運動会では絶対優勝したいと思っています。自分の交流学級の６年１組を招待することも楽しみですが，自分より下の学年の仲間を招待してお世話をしてあげたいという気持ちが強いようです。

写真１　活動を思い出し計画をたてる

（４）単元計画

①初めての計画として

交流学級を招待して「なかよし運動会」をするようになるまで，表１に示すような段階がありました。初めての年は，特殊学級担任教師が計画と準備をして「なかよし運動会」を行いました。参加者は参加可能な先生と特殊学級の子どもだけでした。その運動会の終わりの感想のコーナーで「楽しかったので，今度はお母さんたちを呼んで一緒に『なかよし運動会』をしたい」という意

見がでました。そこから「今度は司会の係をやってみたい」「本当の運動会みたいに得点板を作ろうよ」と話がはずみました。次は，教師と子どもが一緒に計画を立て準備をして「お母さんたちとのなかよし運動会」を行いました。さらにその感想のコーナーで「今度は○年○組の友だちをよびたい」と自分の交流学級の仲間と運動会を楽しみたいという意見が出ました。このようにして，「交流したい相手」「自分がやってみたい係の仕事」「準備したい道具」などの願いを子どもたちが具体的にふくらませ，その活動が定着していきました。

表２　交流学級を招待して「なかよし運動会」をするようになるまで

① 教師が計画と準備をした「なかよし運動会」を特殊学級の子どもが体験する
② お母さんたちを呼んで「なかよし運動会」をする準備をしよう
③ お母さんたちを呼んで「なかよし運動会」をしよう
④ ○年○組の友だちを呼んで「なかよし運動会」をする準備をしよう
⑤ ○年○組の友だちを呼んで「なかよし運動会」をしよう

②例年の活動として定着したら

毎年11月には「なかよし運動会」をやることが定着してくると，特殊学級の子どもは「なかよし運動会」を心待ちにするようになりした。学校行事の運動会が終わったところで，特殊学級でオリエンテーションを行ないます。去年のビデオや写真を見たり，掲示物や道具を取り出して見たりしながら，去年のことを思い出します。一人一人が思いを膨らませて，願いをしっかりもって活動をスタートします。

（５）活動の実際

①交流までの準備の中で

ア　一人で活動が可能になる道具を作る

道具を作るときに大切なことは，子どもが自分の力で活動することが可能となるように，それぞれの子どもの実態に合うようにすることです。その道具を使って活動するなかで，子どもの様子を見ながら，最適なものとなるように道具を作っていきました。

〈事例１〉前の年に得点係を担当したある子どもは計算が得意であり，加算して得点を示していく得点板を使いました。次の年に得点係になったある子どもは，得点を加算していくことはできなかっので，前の年と同じ得点板ではなく，新たに右のような得点板を作りました。それぞれの種目に１位30点（シール３枚），２位20点（シール２枚），３位10点（シール１枚）を入れました。それを一覧にして，全種目の終わったところでシールを全部数えることで合計点が分かるようにしました。

写真２　得点盤

〈事例２〉Ｂ児は発音が不鮮明ですが，前の年に一つ年上のＣ児が放送係をしたことをうらやましく思い，今回は放送係をやりたいと身振りを交えて強く希望しました。放送係が次の種目名をはっきり伝えられなくても，参加者の目線の方向に大きな文字のプログラムが掲示してあれば，何を放送しているか推し測りながら聞くことができます。

このように工夫して道具や掲示物を作りながら，子どもが自らの手で運動会を進められるようにしていきました。

イ　活動を成立させるための場所の工夫

「なかよし運動会」は，運動をする活動でありながら，体育館は自由に使えないため，集会室を使って行いました。教室二つ分くらいの部屋で，３つのチームに分かれて種目を行なうためにはいくつかの工夫が必要でした。

狭い室内で開会式や閉会式などの集会活動を行ない，さらに種目を行なわなければなりませんでした。開会式のために各チーム２列に並んだ隊形を，そのままリレーのスタートの隊形にすると，余計な動きをせずにスムーズに次の活動に移ることができました。

「つなひき」

「デカパンきょうそう」

「たまいれ」

「エキサイティングリレー」

「応援合戦」

「表彰式」

写真３　それぞれの場面

また，室内の床に赤，白，青のカラーテープで並ぶ位置やリレーの折り返す位置や，たま入れで並ぶ位置などを示しました。また，各チームの子どもが狭い場所に入り乱れて活動するので，チームを間違えないように，全員がはっきりと分かるチームカラーのゼッケンを身につけるようにしました。さらに特殊学級の子どもが進行の係をするために立つ位置も色テープを使って示しておきました。

これはこの活動のなかで工夫したことの一例ですが，活動上不都合であると思える条件でも，ちょっとした工夫で解消できます。集会室で活動を行なったことは，結果的には，狭い場所で合理的で無駄なく活動できて，活動も拡散せず親密感が増しました。

ウ　練習はほどほどに

通常学級の子どもを招待して活動を行う前に，特殊学級の子どもだけで会を進める練習をしました。立つ位置や会の進め方の確認の練習は必要ですが，何度も繰り返し練習することは避けました。

Ａ児は立候補して判定係になり，練習では種目が終わるごとに適切に大きな声で判定を言うこ

とができました。しかし，本番になり大勢の通常学級の仲間との活動では，種目が終わってみんながざわめいていても「ただいまの結果，赤組。」と判定を進めてしまいました。練習では仲間たちがざわめくという状況はなかったので，A児にとっては練習通りにやったわけです。そこで「みんなが静かになってから，判定を言おうね。」「静かにならないときは，静かにして下さいと判定係が言うといいね。」とアドバイスをしました。すると，次からは，仲間の様子を見たり，静かにするように言ったりすることができました。

このように実際の状況だからこそ分かる子どもの苦手なことや，困難なことがあります。実際の活動をより多く行ない，そのなかでそれぞれの子が自分で活動に見通しをもって動けるように支援したいものです。

②運動会の当日に

ア　一人一人の願う姿と手立てを

本時の活動のなかでの一人一人の願う姿とそのための手立てをはっきりさせました。C児は，仲間の前に立って号令をかけたり指示したりすることを楽しみにしていましたが，相手の思いを考えずに強引に関わってしまうことがよくありました。「なかよし運動会」で団長をするなかで，自分の団の仲間に優しくかかわり，それにより仲間が楽しく活動している様子に目を向けられるように支援しました。例えば，優しく教えてあげられた場面では，「Cさんが優しく教えてあげたので，みんな並ぶ場所が分かって，うれしそうだね。」というような声がけをしました。このように適切にかかわることで，自分も相手も楽しく過ごせることを体験できるようにしたいと考えました。

イ　「B君の話し方おかしいよ」

交流をすすめるなかで，通常学級の子どものなかに不適切な反応がみられる場合もあります。ここでは放送係をしたB児の話し方をおもしろく思った子どもが，それを真似したことが数度ありました。周りの子どもが「だめだよ。」「やめて。」と注意することで，真似をした子どもも気がついてやめる場合もありました。このように子ども同士のかかわりのなかで解決できるように，まずは周りの子どものはたらきかけを待ちたいものです。けれども，一人の子どもが真似をしたら，周りの子どもがつられて笑ったり，さらに真似を始める子どもがいた場合もありました。その場合は，教師から問題提起して通常学級の子どもがそのことを考えられるようにしました。活動の最後に感想を話す時間があるので，そこで特殊学級の担任から「B君は一生懸命話していたんだよ。友だちが真似をするときっといやだと思うよ。」という話をしました。

子どもに不適切な反応があったときを指導の場と捉えて，発達段階やクラスの様子に合わせてはたらきかけをしていきたいものです。

ウ　素直な感想を大切に

こういった活動の最後には，感想を発表する時間をとるようにしています。お互いに親しくなった気持ちをことばにして確かめ合う時間です。楽しく活動したあとなので，素直な感想がたくさん出ます。「つなひきが楽しかった。」「全校の運動会では１位になれなかったけど，今日は１位になれたのでうれしかった。」といった活動そのものの楽しさを語る子が多くいます。

特殊学級の担任からも「学校の運動会が終わってから，なかよし運動会を楽しみにして三人で準備してきたんだよ。」というように，特殊学級の子どもががんばってきたことをさりげなく伝えるようにしました。

（６）活動を終えて

①交流が終わってから

交流後にも，学年に応じてお礼や感想の手紙を交換し合ったり，それぞれの学級通信で活動の様子を保護者にも知らせるなどしました。通常学級から届いた感想などは，プログラムやマップ（単元の計画書）などの資料と一緒に廊下に掲示して，活動を振り返ることができるようにしました。今年判定係をした４年生のＡ児は活動を振り返りながら，「ぼくは，５年生になったら，放送係をしたい。」と来年への期待を膨らませていました。

Ｂ児が団長をした青団の通常学級の子どもは，その感想を次のように書いていました。

「『なかよし運動会』は楽しかったです。ぼくたちの団長はＢさんでした。優勝できてうれしかったです。また，『なかよし運動会』をやりたいです。」

「なかよし運動会」を行なうと，その後から，下校時に廊下などですれ違った通常学級の子どもが手を振って「バイバイ」と言ったり，通りがかりに特殊学級の教室をのぞいていく通常学級の子どもが急に多くなりました。

②単元実施で工夫したところ

一クラスずつ招待し，一クラスを３チームに分けて，各チームに特殊学級の子どもも入るようにしたことで，少人数で親しく交流できるようにしました。また，特殊学級の子どもが運動会の各係を自分の力でできるように，係の仕事の仕方や係の子どもが使う道具を工夫しました。さらに，実際の学校行事の運動会のチームをそのまま利用することで，各チームの応援歌や応援の振り付けをそのまま使うようにしました。特殊学級の子どもが応援団長になっても，戸惑うことなく練習無しでも応援合戦ができたことにつながったと考えます。

③この単元を実施して

運動会というすべての子どもにとっても身近で親しみのある活動を交流の題材にし，実際の学校行事の運動会で行った活動を生かしたことで，多くの説明をしなくても招待された子どもがスムーズに活動できました。また，種目ごとに勝ち負けがあり，合計の点数で優勝が決まるという活動に，高学年の子どもも夢中になって取り組む要素があったと考えます。

Ｃ児は「なかよし運動会」を通して，仲間と適切にかかわる場面が何度もみられました。

今後の課題として，仲間と関わる場面をさらに繰り返し体験しながら，適切にかかわることが充分身につくように支援していきたいと考えています。